



付 38 話 中国上海に行く No.2

今回も中国上海に行った際のお話しである。キャンパス内は広大で、良く整備され、緑が深い。散歩で道に迷うが、思いがけない出会いもある。学生が集団で食事に行く情景に出くわす。どこの大学でも講義時間が同じだと、食堂に列をなす。ここでも同じだが、同じ服装で、お皿を手にもって並ぶ姿はチョット異様。寮への往復はゼミ生が付いてくれる。英語で会話をするうちに、いろいろな情報を得る。例えば、卒業後、進路や就職先は自ら選択できず、とても不安だという。建設の設計業務は国営企業が行い、国の指示で行き先が決まる。

大学内の施設が Zang 先生によって多数紹介された。図書館や本部棟など、日本の大学と大差はない。ただ、でかい。計算センターに案内されたときは息を飲む。当時の最新機種である SUN マイクロの薄型ワークステーションとディスプレイが数百台、ズラーと並ぶ。数日前に搬入されたばかりだという。国の重点大学で予算が豊富にあるためか、教育設備が充実している。これほどの量は日本ではめったに目にしない。優秀な学生と充実した設備、同様の大学が中国全土にあるという。驚きと共に日本にとって脅威である。高々数十年優位を保つ科学・技術分野も、いずれは逆転するだろうと、ふと思った。次に建築設計センターに出かけた。中廊下が数階吹き抜け、両側に設計施設が並ぶ。当時の中国における建築設計業務は、国の施設か、大学内で行う。特に、同済大学は上海近郊の建築を実務設計するという。院生がここでオンザジョブ・トレーニングをしているという。教育法としては、日本の先をいく。

日本で会った大学助手の Kn 先生に語学センターを案内してもらおう。彼女によれば同済では第二外国語はドイツ語が主流で優秀、日本語を採る学生は成績が落ちるといふ。彼女自身は日本語教育の教員であり、日本語は無論堪能。第一外国語は英語、学生が憧れる国もアメリカ、当時の日本と余り変わりはない。優秀な学生はアメリカ留学を夢見る。次に、欧州であり、大学の特殊性から同済の学生はドイツ留学を希望する。残った少し成績が劣る学生が、アジア、特に日本に留学する。これは彼女から聞いた話だが、多分、現在でもそう変わりはない。

一度、Zang 教授に晩餐の招待を受けた。教授自ら迎えに現れ、キャンパス内を自宅まで自動車移動する。専任教授が住む地域は、緑が深く、住居が森の中に点在して、まるで山の中のリゾート地である。それほど大きな家ではないが、周囲に調和して趣のある景観である。到着す

ると、家族が迎えに現れ、居間に案内される。しばし談笑。Zang 教授は日本語が少しでき、私の下手な英語とで会話を楽しむ。正確な家族構成は思い出せないが、両親と子供がひとり。ここでも中国人に似ていると言われた。多分、良い意味と思うが、余りうれしくはない。食事は家庭料理で、当然中華料理。中華料理は大好きで食事中も楽しかった。上海旅行中、最も癒される時間を過ごしたと思う

大学滞在中、三度の食事はキャンパス内の食堂で済みます。この食堂は、招聘外国人教師用で、体育館ほどの広さがある。場所は寮の近くで、歩いて行ける。食事は中華料理が主で、一汁三菜、選択することができる。結構おいしい。初めて、青梗菜という中国野菜を食べる。帰国後、妻に告げるとこれまで食べたことがないと言う。旨いと言ったつもりはないが、その後、時々食卓に上る。

予定より早く講義が終了したので、1泊2日で観光旅行へ行くことにした。上海の近くには有名な蘇州がある。Zang 先生に旅行の手続きをお願いすると、快諾。往復の切符とホテルの予約、英語版蘇州観光マップなどを渡された。翌朝、Zang 先生や学生たちにお礼と別れの挨拶をした後、事務所で宿泊代と食事代の支払いを済ませ、タクシーで上海駅に向かう。駅は既に群衆でごった返し、切符売り場は長蛇の列。予約なしでは蘇州にたどり着けない。蘇州は東洋のベニスと呼ばれ、長い歴史と魅力的な歴史的建造物や庭園を誇る。観光マップに従って観光地を回った記憶はあるが、ほとんど覚えていない。何故か朝の出勤時に、自転車の大群が広い道路一杯に移動する様と、絵のような水路と街路樹を覚えている。観光を終えて帰途、再び鉄道で上海駅に戻る。

ホテルに行くためタクシーに乗る。適当にタクシーを捕まえて、乗り込むと、若者2名が入り込む。またもトラブル。どうやら日本でいうところの白タクであったらしい。しかも高額の運賃を要求される。あーあ、お上りさんで脇が甘く見えるのか、常に狙われる。ホテルは上海シェラトンだったと思う。2泊した後、成田に向かう予定。ホテルは快適。翌日 Kn 先生が迎えに来る。1日上海の観光案内をお願いした。市内観光と共に、地元人が行く場所へ出かけ、お土産を買う。最後に夕食を共にし、一日を楽しく過ごした。入国の際、外国人は外貨を兌換券に交換する。残れば外貨に戻すことができる。当時の人民元は外貨に交換できない。買い物する度に兌換券を要求される。兌換券でなければ買い物できない場所や、外国に仕送りする際、必要となる。

後年、中国人の留学生に、案内するから中国に行こうと誘われるが、何かと理由を付けて断る。やはり中国には行きたくないトラウマがある。